平城宮跡第２０９次発掘調査　現地説明会資料　　891118

本調査はデパート改築に伴う事前調査として実施した。調査面積は約１８００㎡、調査は本年１０月２日に開始し、現在なお調査継続中である。

調査地は平城京右京一条二坊十坪にあたり、奈良時代の後半に造営された西隆寺の寺地内に位置する。１９７１年から１９７３年にわたり、西隆寺内の発掘調査がおこなわれ、１９７１年には塔と東門が、１９７２年には金堂と南面築地が検出されている。今回の調査区は金堂の東側にあたり、東面回廊が検出されるもの予想された。

調査の結果、西隆寺に関する遺構として東面回廊が検出され、西隆寺造営以前の遺構として、奈良時代前半の掘立柱建物、古墳時代の遺構として大小の溝が検出された。

○西隆寺の遺構

今回の調査では東面回廊を検出した。遺構は西隆寺造営時の整地面で検出し、回廊基壇土は削平のため検出出来なかったが、回廊西雨落溝・礎石据え付け穴（礎石を置くため掘った穴）・回廊を横切る暗渠（回廊の下を通る溝）の底石と側石を検出した。礎石据え付け穴より、回廊の形式は複廊で、桁行柱間寸法は１０尺、梁間柱間寸法は８尺であることが判明した。また、東回廊の中央柱筋は、金堂の中心から東へ３９ｍ（１３０尺）の位置にあたり、東西回廊間の中心距離は２６０尺と推定される。西柱筋の西側には南北に瓦が並んでおり、これは西隆寺廃絶時に西雨落溝の化粧石を抜いた後に、瓦が投げ込まれたものと考えられる。

暗渠は、発掘区内北から５間目で検出した。位置的には金堂基壇の背面側の延長上にあたり、金堂からの排水施設とも考えられたが、溝の底石は金堂までは延びなかった。暗渠の構造は、底石に拳大の玉石を２列から３列に敷き、西端に凝灰岩が据えられ、玉石列の西端が西雨落溝の西層と考えられる。そして、側面に凝灰岩を立てており、上部は凝灰岩の蓋が置かれたと推定される。底石を子細にみると、玉石の並びが変わっているところがあり、この位置を基壇端と推定すると西側柱の中心から、基壇端までは４尺となる。そうすると、基壇端から西雨落溝西層までがおよそ３．４尺となる。なお玉石列の南北の雨落溝と推定される位置には玉石列や凝灰岩が残っておらず、暗渠が雨落溝と交差部分では、暗渠の底面が雨落溝の底面より一段深かったために、暗渠のみ残ったものと考えられる。

西隆寺が廃絶したときに投棄された遺物としては、二彩陶器片・灯明皿・軒瓦・鬼瓦・手斧の歯が出土している。

○奈良時代前半の遺構

西隆寺造営前の奈良時代前半期の遺構として、掘立柱建物を１３棟・掘立柱塀を２条と井戸２基を検出した。建物は、いずれとも桁行柱間数が３間程度で、柱間寸法は６尺または７尺とちいさい。井戸１は井戸枠の四隅に柱を立てて、縦板を張っているが、井戸２は井戸枠が抜き取られている。

○古墳時代の遺構

幅３ｍ、深さ５０ｃｍの大斜行溝と、この溝に直行する太い溝を検出し、また、この大斜行溝に平行もしくは直行する細い溝を検出した。そして、発掘区中央北寄りで、掘立柱建物を検出した。大斜行溝からは、４世紀から６世紀の土器が出土した。

今回の調査の意義

今回の調査のもっとも大きな成果は、西隆寺の東面回廊を検出したことである。この回廊の検出によって、中心伽藍を取り囲む回廊の東西長を確定することが出来た。そして、他の平城京内の官寺に比べ規模がやや小さいものの、回廊の形式は複廊とし、西隆寺が京内の官寺と同等の格をもって造営されたことがうかがえる。また、回廊が金堂に取りつかずないことが判明し、伽藍配置がほぼ「西大寺古絵図」に描かれた伽藍配置であったことが推測される。したがって、「西大寺古絵図」では中心伽藍がほぼ正確に描かれているといえる。

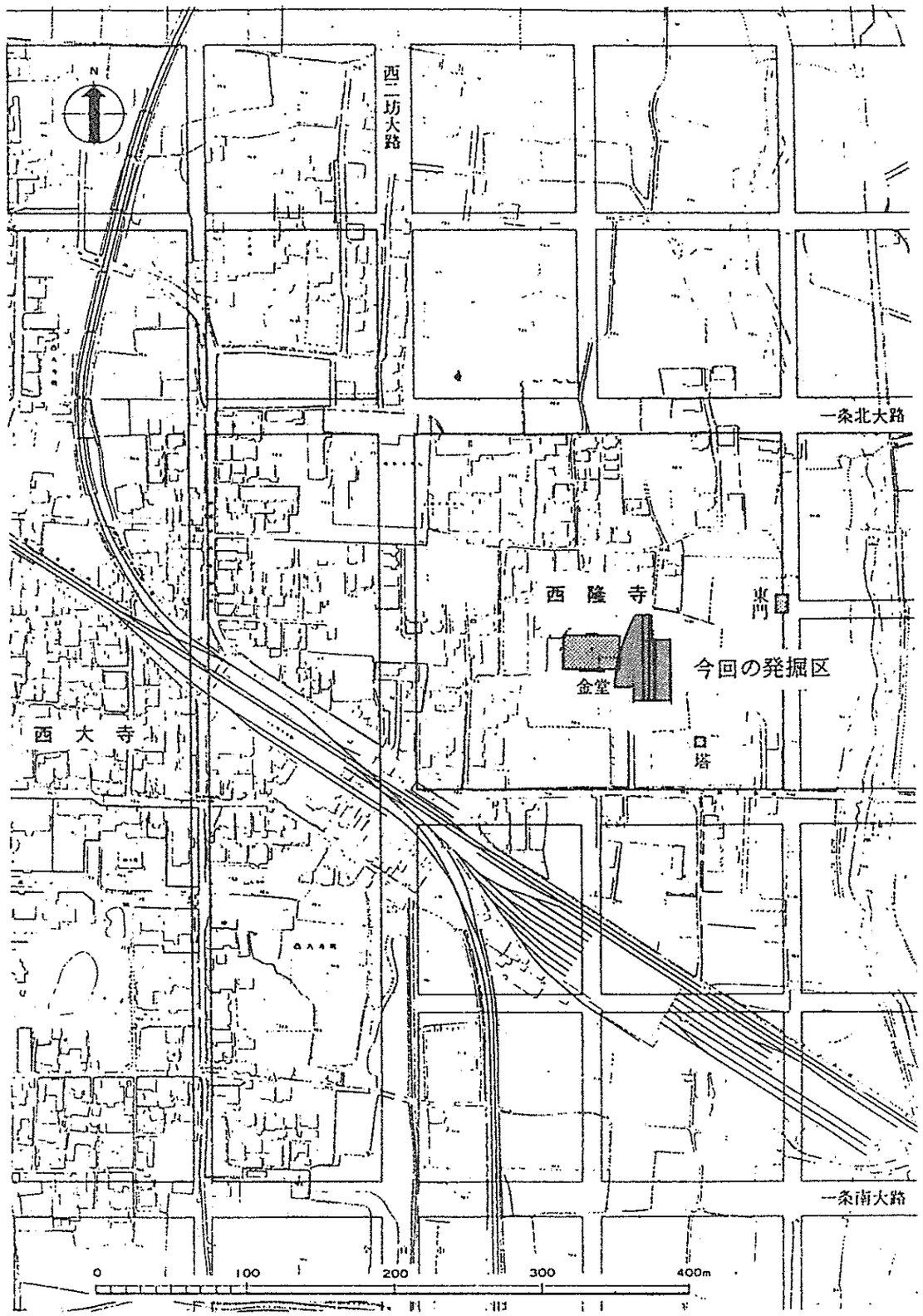
なお、寺院廃絶寺に投棄された遺物は、土器・瓦とも平安時代前期を降るものはなく、西隆寺が比較的早い時期に廃絶したと考えられる。

○西隆寺の歴史

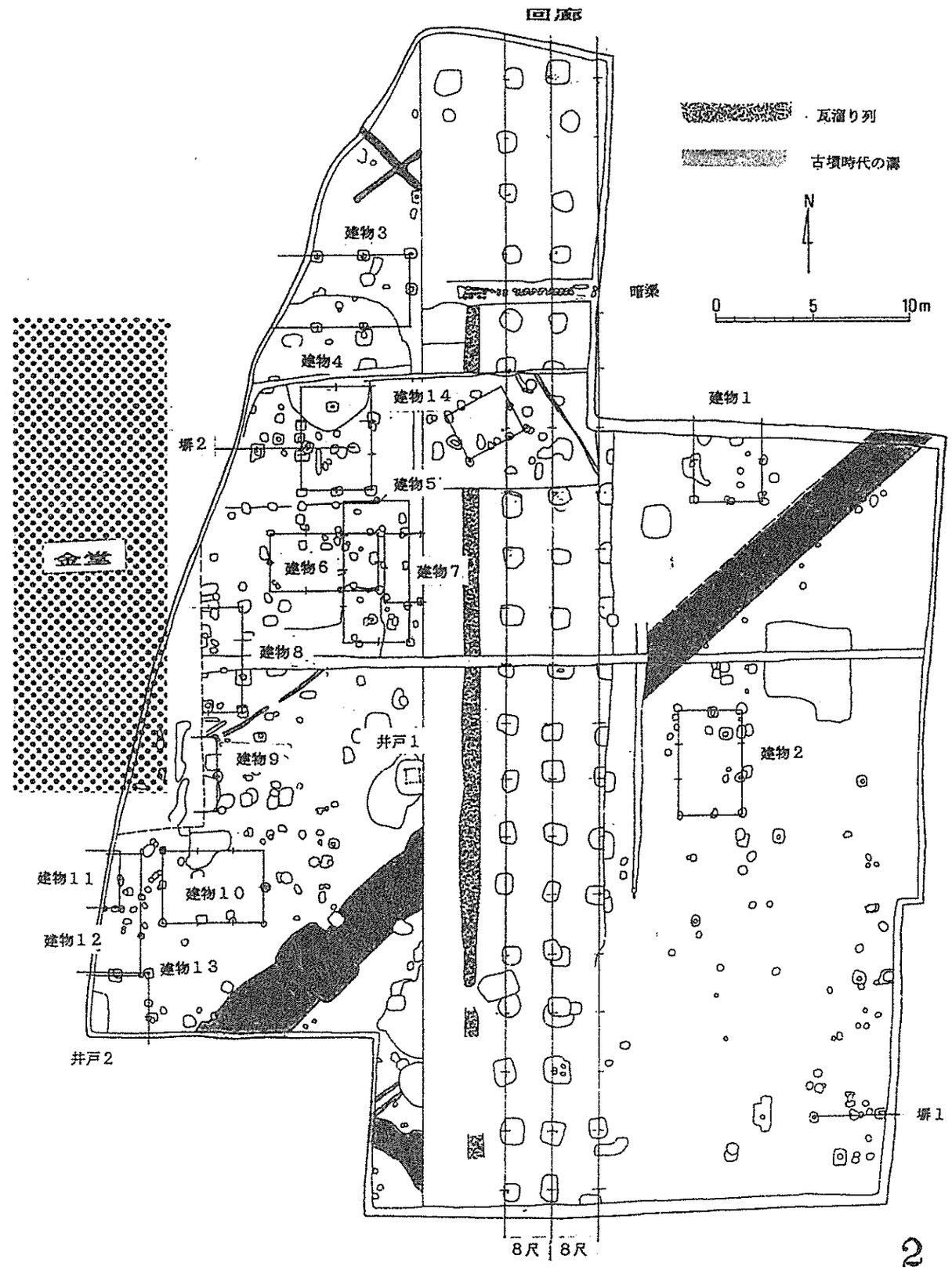
神護景雲元年（７６７）	造西隆寺司長官に伊勢朝臣老人
	造西隆寺司次官に池原禾守
宝亀二年（７７１）	薬師・東大寺など官の大寺とともに、寺印が領たれる。
	すでに、寺院として整っている。
宝亀九年（７７８）	皇太子山部親王のために読経（東大寺・西大寺の３寺）
１０世紀には存続	弘仁式・延喜式　越後国の正税中に西隆寺料一万束
建長３年（１２５１）	田畠になっている

寺院	金堂規模	金堂基壇	回廊形式	桁行柱間寸法	梁間柱間寸法	回廊東西	回廊南北
西隆寺	(105X56)	127X79	複廊	１０尺	８尺	２６０尺	
薬師寺	77.5X40	98.6X60.8	複廊	１３．５尺	１０尺		
西大寺（弥勒）	119X53						
西大寺（薬師）	106X68						
大安寺	118X60		複廊	１３．８尺	１３尺	２２６尺	
東大寺	244X124	324X204	複廊	１５尺	１５尺	５４６尺	６５０尺
陸奥国分寺	83X44	104.6X65.5	複廊	１０尺	８尺	２３４尺	１８２尺
三河国分尼寺	87X46	115X76	複廊	１０．５尺	１０尺	２１０尺	２０９尺
信濃国分尼寺		100X64	単廊	１１尺	１１尺	１８０尺	
下野国分尼寺	69X40	90X59	（単廊）		基壇２０．３	１７５尺	１４４尺

奈良時代の回廊の例



調査区位置図



発掘遺構図

伽藍中軸線

東門

今回の発掘区

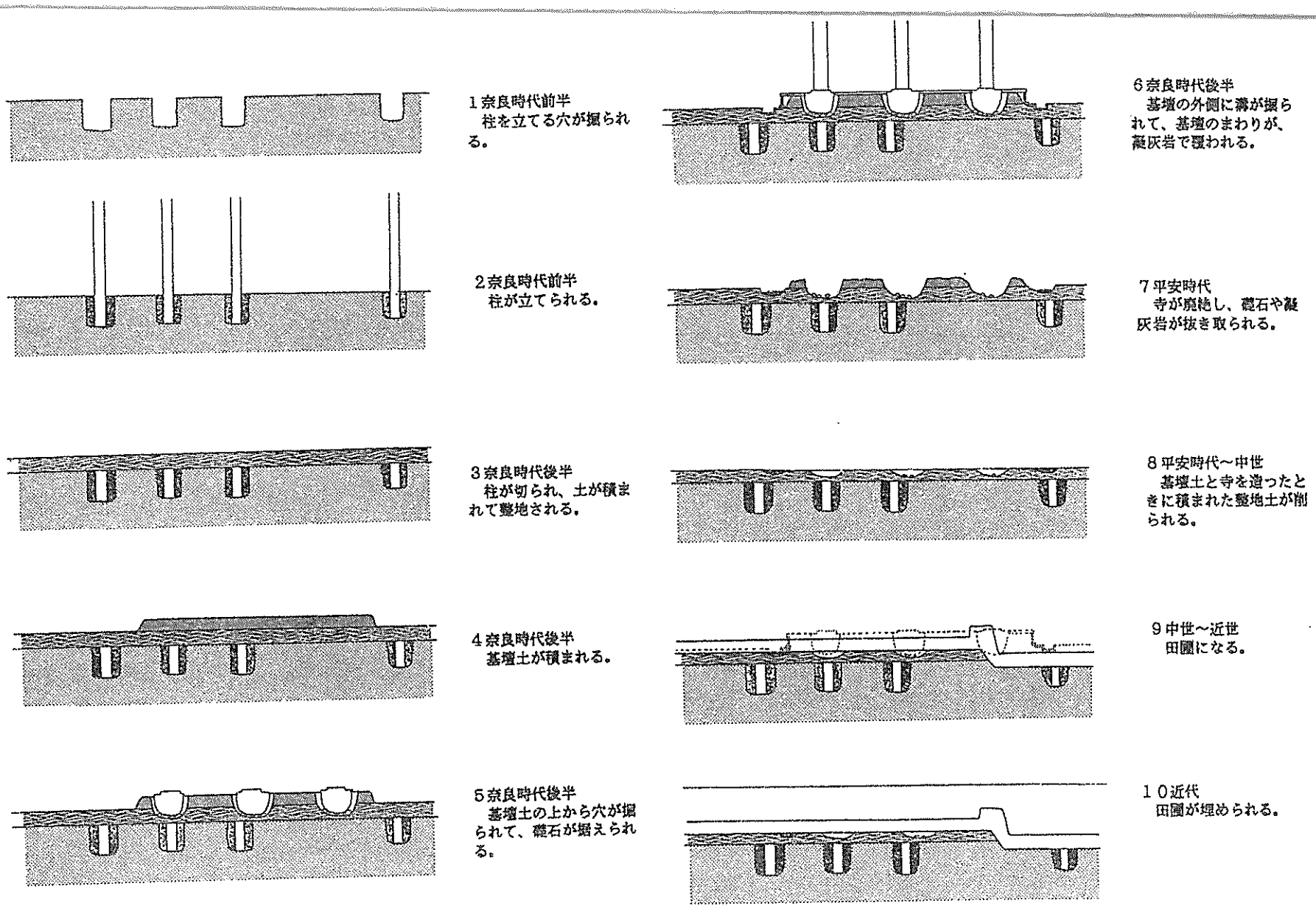
金堂

回廊

39m 130尺

塔

過去の調査成果と今回の調査成果



地下遺構の変遷模式図